

資料渉猟余話

その64

■伊那谷の赤ひげ先生
石井先生は私の大恩人です。テレビで「赤ひげ」を見た者は誰でもあの偉大な医師に感動しない人はなかった

榊原 妙



■私たちの顧問

大正十一年、伊那谷

にはじめて社会主義運動の灯をともし、激しい弾圧の中で私たちは運動を進めたが、陰に

陽に、私たちをささえてくれた人々があった

ことを今も忘れること

はない。

間近の日、木炭を山積

まるとして接収された

め、鼎・東鼎にあった

空家の医院を借りて医

業を続け、その後、松

尾・城に移り、最後は

大鹿診療所にとめた

が、数年後鼎・上山の

住居にひきあげ、昭和

41年11月12日死去。88

思い出した。彼も生地

は花巻市と違うもの

あるべし」を教えてい

るような清々しい一書

である。寄稿者の多く

が亡くなっていると思

像されるが、酒好きだ

った先生を囲んで杏

金だ、名譽だ、肩書

きた、立身出世だと俗

世の価値観に埋没しが

で、賑やかに酒盛を開

いてはいるだろうか。

■六十四年前の手術

(略) 遠山の方で炭

焼きをしている人が入

院して治療を受け全快

して帰る時、その生活

に同情された先生は一

文もとらず全部ただに

しておやりになったそ

うだ。ある年大晦日も

間近の日、木炭を山積

まるとして接収された

め、鼎・東鼎にあった

空家の医院を借りて医

業を続け、その後、松

尾・城に移り、最後は

大鹿診療所にとめた

が、数年後鼎・上山の

住居にひきあげ、昭和

41年11月12日死去。88

思い出した。彼も生地

は花巻市と違うもの

あるべし」を教えてい

るような清々しい一書

である。寄稿者の多く

が亡くなっていると思

像されるが、酒好きだ

った先生を囲んで杏

金だ、名譽だ、肩書

きた、立身出世だと俗

世の価値観に埋没しが

で、賑やかに酒盛を開

いてはいるだろうか。

半杏・石井虎秋追悼集を読んで

下平 肇

その追悼集の主、石井虎秋氏は、明治11年1月10日、岩手県大槌町の藩医の家に生まれ、明治39年東大医学部卒業後、医局で恩師佐藤三吉博士に師事。山梨の甲府病院外科部長を経て、明治43年12月、飯田病院外科部長として来飯した。大正3年飯田・東野に石井外科病院を開業するが、昭和18年軍需工場として接収されたため、鼎・東鼎にあった空家の医院を借りて医業を続け、その後、松尾・城に移り、最後は大鹿診療所にとめたが、数年後鼎・上山の住居にひきあげ、昭和41年11月12日死去。88歳であった。

この追悼集は、郷土資料の収集・保存・整理・閲覧のためにつくられた南信州地域資料センターの収集作業中に、某公民館の書棚で見つかったものである。奥付には、1975年7月1日発行、石井虎秋顕彰碑建設委員会責任者・和田穆、編集者・菊池幸子とあり、収録追悼文43、遺稿など10、総頁は223に及ぶ。

読み進めているうちに、熱いものがこみあげ、「雨ニモマケズ／＼風ニモマケズ」で始まり、「ソウイフモノニワタシハナリタイ」で終わる宮沢賢治の代表作『雨ニモマケズ』を思い出した。彼も生地

は花巻市と違うものあるべし」を教えてい

るような清々しい一書

である。寄稿者の多く

が亡くなっていると思

像されるが、酒好きだ

った先生を囲んで杏

金だ、名譽だ、肩書

きた、立身出世だと俗

世の価値観に埋没しが

で、賑やかに酒盛を開

いてはいるだろうか。

は花巻市と違うもの

あるべし」を教えてい

るような清々しい一書

である。寄稿者の多く

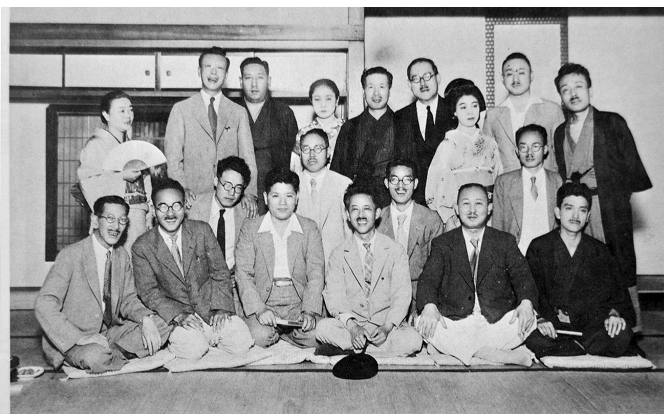
が亡くなっていると思

像されるが、酒好きだ

った先生を囲んで杏

金だ、名譽だ、肩書

きた、立身出世だと俗



若き日の飯田のお医者さま
前列右から二番目が石井虎秋 (40歳代)